

平成29年度1回 加曽利貝塚調査研究部会 議事録

1 日 時 平成30年2月27日（火） 午後3時00分～午後5時00分

2 場 所 千葉市立加曽利貝塚博物館 多目的室

3 出席者 （委員）

岡本委員、高橋委員（部会長）、谷口委員（副部会長）

（事務局）

滝田文化財課特別史跡推進担当課長、森本主査、西田主任主事

高梨加曽利貝塚博物館長、山下主査

西野埋蔵文化財調査センター所長、松田主任主事

菅谷嘱託主任研究員

4 議 題

議題

（1）部会長・副部会長の選任

（2）平成30年度以降の発掘調査計画について

報告

（1）平成29年度調査研究事業報告

（2）平成29年度発掘調査結果報告

5 議事の概要

議題

（1）部会長・副部会長の選任

（2）平成30年度以降の発掘調査計画について

報告

（1）平成29年度調査研究事業報告

（2）平成29年度発掘調査結果報告

6 会議経過

【開会】

（森本主査）

ただいまより、平成29年第1回加曽利貝塚調査研究部会を開催いたします。私、司会を務めさせていただきます森本でございます。高橋委員・谷口委員におかれましては10月19日に加曽利貝塚へお越しいただきましたが、発掘調査の現地指導の形を取らし

ていただきましたので、今回が今年度第一回目の会議となります。本日の会議は、市の情報公開条例により公開となっております

本日は3名の委員全員に出席いただいていることから、会議が成立していることをご報告申し上げます。

また、オブザーバーとして、千葉県教育庁文化財課より、牧文化財主事に出席いただいております。

それでは議題に入る前に、今年度最初の部会になりますので、委員の皆様をご紹介します。

千葉大学名誉教授 岡本委員

早稲田大学教授 高橋委員

國學院大学教授 谷口委員

議題 (1) 部会長と副部会長の選任について

(司会) 条例第7条第6項により、部会に置くことが定められております。部会長が決まるまでの間、事務局より滝田特別史跡推進担当課長が進行を務めさせていただきます。

(滝田) 特別史跡推進担当課長の滝田でございます。

部会長が決まるまでの間、私が進行を務めさせていただきます。

議題の1、部会長と副部会長の選任でございますが、部会長の選任につきましては、条例第7条第7項により委員の互選となっておりますが、いかが取り計らったらよろしいでしょうか。

それでは事務局より、ご説明をお願いします。

〔事務局説明：資料1により、説明。〕

(岡本委員)

僭越ではありますが、昨年度まで加曾利貝塚総括報告書編集部会の部会長を務めておられた高橋委員を推薦したいと思います。

(滝田)

ただいま、高橋委員を推薦する意見がございましたが、いかがでしょうか。

(各委員)

異議なし。

(滝田)

ご異議ないとのことでしたので、高橋委員に部会長をお願いしたいと思います。高橋委員、部会長席をお願いします。ここからは進行を部会長をお願いします。

(高橋部会長)

どうぞよろしく申し上げます。それでは引き続き、副部会長の選任を進めます。

副部会長は会長が選任することとなっておりますので、谷口委員をお願いしたいと思います。

すが、谷口委員、よろしいでしょうか。

(岡本委員)

異議なし。

(高橋部会長)

それでは谷口委員に副部会長お願いします。では、会議を進行します。次第を変更し、報告事項を先に行いたいと思います。

報告 (1) 平成29年度調査研究事業報告

(高橋部会長)

それでは事務局より、ご説明をお願いします。

〔事務局説明：資料2、資料3により、説明。〕

(高橋部会長)

ただ今の説明を受けまして、何かご意見ありますか。

(谷口委員)

加曽利貝塚で共同研究・連携活動を進めていくというのはとても良いと思うのですが、説明にあったように個々に研究を行うと、研究成果の掲載される場所が一元的にならなくて、色々なところに分散してしまう気がします。三内丸山遺跡の場合は研究を公募して、応募してもらった研究計画のうち優れたものへ研究費を出し、研究会やシンポジウムなどで研究成果を公開し、県としてまとめる仕組みをつくっています。そういうものが伴ってくると、千葉市が加曽利貝塚で研究を主体的に進めていることがよりアピールされて良いと思います。予算が必要ですので、すぐには出来ないと思うのですが、そういった形を模索されてはいかがでしょうか。

(岡本委員)

加曽利貝塚に関連する研究を行いたい人はたくさんいるでしょうから、市としてどのように受け入れるのか立場を決めておかないと。

現在、市では研究成果を掲載する場として加曽利貝塚博物館の『貝塚博物館紀要』しかありませんが、まずはこの紀要などに最初の成果を掲載し、その後自由に使ってもらうなど取り決めをしておく必要があります、市に研究成果が何も残らなくなってしまっただけでは意味がありませんので、きちんと検討しておいてください。色々な研究を公募するにも予算や体制の問題もあります。

(谷口委員)

新潟県の津南町の事例も参考になります。小さい町ですが、一件当たり10万円の研究費を若手の研究者に出し、色々なテーマで研究成果を出してもらっています。たとえば石器や土器の実測を委託に出す場合、10万円くらいでできることは限られますが、研究への補助としてアイデアを持っている人に10万円を出して一生懸命研究してもらう方が使い道としては良いと思います。そういった取組みも参考にされてはどうでしょうか。

(高橋部会長)

お二人の委員からいただいた意見について、今後、調査研究体制の検討を進めていくなかで、検討してください。共同研究・連携活動は両方がマッチングすることによって進めていくことができる研究ですので、どうやって受け入れるのか、全てを受け入れるのか、受け入れた研究に研究費を出すのか、成果の公開をどうするかなどまだまだ整理されていません。これから調査研究体制を整備していく必要がありますので、考えていただければと思います。よろしく願いいたします。

つづいて現在、加曽利貝塚で進めているレーザー測量についてですが、早稲田大学考古学研究室で測量した成果とのずれなどは生じていないですか。

(森本)

早稲田大学の測量成果も受託業者に提供し、整合がとれるよう進めています。

(岡本委員)

加曽利貝塚が特別史跡になり、今後の調査研究を進めていく上で、日本全国の貝塚の資料を収集するといった方針も加曽利貝塚の大きな役割です。今すぐ出来なくても、将来、新しい博物館を全国の貝塚センターとして整備するなどといった意義付け、目標を調査研究計画などに入れておく必要があると思います。

(高橋部会長)

貝塚に関する調査研究の説明の中で、県内の貝塚については触れていましたが、日本の貝塚センターとして全国の資料を集めるというのは意義があることですね。来年度の計画をつくる時には入れていただければと思います。岡本先生これでいかがでしょうか。

(岡本委員)

初年度なので模索の段階として検討を始めていけば良いのではないのでしょうか。

(高橋部会長)

他にご意見が無いようですので、平成29年度発掘調査結果報告に進みたいと思います。

報告 (3) 加曽利貝塚の発掘調査について

(高橋部会長)

それでは事務局より、ご説明をお願いします。

〔事務局説明：資料3-1、3-2により、説明。〕

(高橋部会長)

今の説明を受けまして、何かご意見ありますか。

(岡本委員)

成果の普及活動の説明資料の中に11月に実施したシンポジウムが入っていませんが、発掘調査の現場中継もしていたので、入れておくべきでは。

今年度は天候も良くなく、発掘期間が短かったこともあり、十分に掘りきれなかったけれど、特別史跡である以上、本格的に継続的に発掘していくためにはある一定の成果が

示せるようなものでないと理解が得られません。来年度は「加曽利貝塚はこうだ」と市民に見せられるような発掘調査を行う必要があります。

今年度の遺跡見学会では竪穴住居跡を半分だけ掘った状態で見てもらった訳ですが、来場した市民がどれだけ理解して帰ったかわかりません。初年度であり、土層の堆積もわからないなか慎重にならざるを得なかった側面もありますが、来年度もまた同じではどうなのかと。精緻に発掘するのもわかりますが、成果をある程度出していかないとまずいではないかと。来年度は担当職員が専従できるような調査体制の整備も含め、年間を通しての発掘調査計画を作り、少なくともこれくらいの範囲は掘り上げるというのを考えてやっていくべきです。加曽利貝塚を何年掘っていくかはわかりませんが、ある程度の成果を出していかねばいけないと私は思います。ぜひとも来年度はこの点を克服してやって進めていければと思います。

(高橋部会長)

何のために調査するのかを示さないと、単に「学術的なものです」ではやはりなかなか納得できない。大事にして100年後に発掘調査をしたらよっぽど確かなデータが出るだろうと言われかねない。やるならどこまで出すかを含めて30年度の計画には盛り込んでくれということです。他にご意見いかがでしょうか。

(谷口委員)

パワーポイントの説明資料で、褐色土の覆土の竪穴住居跡の上を黒色土が覆っていましたが、層の境目がすばっと不整合のようになっていました。あの黒色土はどのようなものだと考えていますか。普通でしたらもっと漸移的に覆土からじわじわと黒色土に移行していくのだと思いますが。後世の客土とかそういうのでなく、縄文時代晩期の遺物がたくさん入っているので、縄文時代晩期の遺物の包含層だと思うのですが。

(松田)

竪穴住居跡以外では、暗褐色土から黒色土へ漸移的に移っており、明瞭に分かれていません。ただ、褐色土と黒色土の境目はすばっと切れるように分かれているところがあります。なぜかというのは掴みにくく、要因はわかりません。

(岡本委員)

竪穴住居跡が安行3b式期くらいであれば、黒色土の堆積はそれ以降ですよね。晩期の包含層で黒色土って他の遺跡でもありますが、それより新しい？

(松田)

住居跡を覆っていますが、黒色土から出てくる遺物も安行3b式土器くらいで、その後の安行3c式土器は出てきません。だからその間の範囲の出来事だと思うのですが。

(岡本委員)

ああいう褐色土を覆土とする晩期の竪穴住居跡は他に例があるのですか。普通は晩期の竪穴住居跡は黒色土の包含層の下に出てきますよね。

(高橋部会長)

佐倉市の吉見台遺跡がそうですね。最初にロームが出てしまって、皆それが地山だろうと思っていたら中から土器が出てきておかしいということになって。多分ちょうど加曾利貝塚を発掘している頃、同時期に佐倉市で近森正さんが大きい竪穴住居跡で褐色土を検出しています。加曾利貝塚と吉見台遺跡でお互いに調査成果を確認しながら発掘していると思うんですよね。

(岡本委員)

そういう事例をたくさん集めたほうが良いですよね。あれだけ掘り込みの深い晩期の竪穴住居跡は今まで見たことがありませんので。また、他にも褐色土が広がっている場所は、その下に竪穴住居跡がある可能性もありますよね。

(松田)

褐色土は貝層部分には広がっていません。貝層の上にも堆積していいはずなのにありません。貝層の上は薄いからなくなってしまい、厚く堆積している窪地部分には残ったのか、もう少し他の場所に堆積しているのが見られてよいのではと思います。

(西野)

自然にはあのように堆積しないと考えています。

(岡本委員)

少しずつ窪地に溜まったという感じではないですよね。

(高橋部会長)

井野長割遺跡もそうだったと思うんですよね。さらに海外でも結構類例があると思いますよ。だから発掘していると純然としたロームと間違えるくらいきれいな褐色土もあって、しかしその中に土器が入っていておかしいぞということになる。自然に溜まるようなことではないですよね。

(岡本委員)

先日の袖ヶ浦市の山野貝塚のシンポジウムでも擬似ロームみたいなのがあるとの報告がありました。なぜあのような現象が起きるのかわからないけれど。

(西野)

流山市の三輪野山遺跡の中央窪地もそうですし、四街道市の八木原貝塚で斜面盛土と言われているものも二次堆積と見られるロームが堆積しています。掘ったローム層を動かしている事例はあり、今回のケースも似ているような気はしますが、同時に見比べたわけではありませんので。

(菅谷)

似ている気はしますが、一概に褐色土といっても、それぞれの遺跡で真っ黒な黒色土とそれぞれ見比べているだけで、同じような性質の土壌だとは思いますが、それぞれの遺跡の褐色土同士を比較検討するようなことをしなければ、全く同じとは言いきれません。

(高橋部会長)

晩期の褐色土の事例は、埼玉県方面にも利根川沿いを中心に延びていっていますよね。

伊奈町の本上遺跡もそうです。褐色土の堆積が地表面にまで影響を与えていて、マウンドがうねるようにつながっています。加曽利貝塚のマウンドも表土を剥いてみないとわかりませんが、ひょっとしたら貝層の頂上を褐色土が覆っているということもあり得るのでは。

(菅谷)

今回の発掘調査でもそういう印象を受けています。とくに褐色土の堆積範囲の中央、遺構として考えている範囲の中央部分が少し高くなっている印象です。

(松田)

窪地に流れ込んでいるのであれば、中央部分は低くなるべきところですが、むしろ盛り上がっている印象です。

(高橋部会長)

来年度以降の発掘調査を進めていく上で、大きな課題が出来ましたね。他にいかがでしょうか。

先ほど岡本委員からもありましたが、黒色土の包含層についてお聞きします。松戸市の貝の花貝塚が典型的な事例として言われますが、この有機質の黒色土の中にはよく獣骨が入っているようですが。その点はいかがでしたか。

(菅谷)

今回の発掘調査で、包含層として掘り下げた範囲では獣骨はほとんどありませんでした。ただし、竪穴住居跡の覆土として掘り下げた範囲では、明らかにかなり強く焼けた獣骨が大量に含まれる層がありました。その層からは磨製石斧が2点完形で出土していますが、我々の眼で見ると熱を受けて変色し、かなり脆い状態に変質しています。もちろん熱を受けているかどうか、石材の専門家にきちんと見てもらう必要がありますが。土器の中でも強い熱を受けて部分的に発泡し、土器自体が溶けかかって歪んでいるものを1点、そこまではないけれど2次的な焼成で脆い状態になっているものを1点確認しております。

ですから焼けた獣骨に加え、かなり火を使った様子というのが竪穴住居跡の中で確認できる、そういった堆積が一層あります。

(高橋部会長)

竪穴住居跡の中で焼いた、あるいは竪穴住居跡が焼けたといった印象でしょうか。

(菅谷)

その場で焼いたのではなく、他で焼いたものを竪穴住居跡の窪みに流し込んだという印象です。

(高橋部会長)

違う場所で焼いたもので、堆積している焼土の状況から見ても、その場で焼いたという感じではないということですね。わかりました。

他にいかがでしょうか。無いようですので、次に進行します。

議題 (2) 平成30年度以降の発掘調査計画について

(高橋部会長)

それでは事務局より、ご説明をお願いします。

〔事務局及び文化財保存計画協会による説明：資料4、5により、説明。〕

(高橋部会長)

今の説明を受けまして、何かご意見ありますか。

(岡本委員)

今回発掘した竪穴住居跡は、過去の発掘調査の番号を使って85号住居跡と命名しているわけですが、こういう過去の遺構番号名を今回から新しく掘り始めた時にどう処理していくのが合理的なのか検討していますか。

今後、今まで番号がついてない遺構が出てくる場合も当然あるわけで、その時にどうするか最初にきちんと決めておかないと混乱してしまいます。事務局でこういう風にしたいと定義していただければと思いますが。

(菅谷)

今回の調査では遺構であると認識した時点で、遺構1、遺構2という順位に1番から番号を付けています。ですので、85号住居跡についても、発掘時には最初、竪穴住居跡か断定できないことから遺構2として調査しました。遺構1は、北西側の褐色土が広がる地点です。

(岡本委員)

それで、竪穴住居跡と分かった段階で1号住居跡、2号住居跡に変更するのですか。

(菅谷)

総括報告書で番号が与えられている遺構と判断できれば、その番号を使うこととし、今回は85号住居跡としています。

(岡本委員)

旧番号にこだわる必要はないと思いますが。旧番号と対比できれば十分で、こだわっていたら大変なことになるのでは。今回、新たに番号を設定するのがすっきりしていて、新旧対照表をつくれれば良いはず。

(谷口委員)

対照できれば問題ないですよ。

(岡本委員)

旧85号住居跡といわれても何のことかわかりづらいと思います。

(菅谷)

かつての発掘調査で付けられた遺構番号の重複が激しかったため、総括報告書では通し番号になるように遺構番号を振り直しました。さらに過去の発掘調査の際にも、調査時に付けた遺構番号を報告書作成にあたって振り直しており、既にその新旧対照表が作られています。総括報告書の中で、それらを一応何とか対照できる形にまとめることができた状況ですので、できればこれ以上新旧対照表を増やしたくないという気持ちもあります。

例えば、間違いなく過去に番号を付与した竪穴住居跡と分かった段階で、その番号を踏襲すれば、混乱が少ないのではと個人的に思います。

(岡本委員)

混乱がなければ一番いいと思いますが。今回の調査範囲の中でも、未確認の遺構番号があって、85号住居跡があって、さらに新しい遺構番号があるとなると混乱しないのか、きちんと検討を進めた方が良いのでは。

(菅谷)

完全に掘り上げるのが出来ないにしても、全体の8割9割を掘り上げた段階で、竪穴住居跡で問題ないとなれば、まず過去に発掘調査しているものであれば旧番号を踏襲し、新しい竪穴住居跡になれば、これまでの番号に追加する形を考えています。これについては何か他に良い考えがあれば検討したいと思います。

(高橋部会長)

今まで何回くらい遺構番号の振り替えをしていますか。

(菅谷)

例えば、北貝塚の住居跡群観覧施設の範囲、第3次発掘調査では、既に発掘調査時と当初の報告時で番号を変えおり、さらに総括報告書で変えていますので3回になります。出土遺物に注記されている番号は、最初の発掘調査時の番号です。

(高橋部会長)

出土遺物の注記が総括報告書で振り直した番号と違う番号であって、これから20年後、30年後に新しい人達が見た時、きちんと対照できるようにしておくことは当然必要です。今後の発掘調査で新たに何軒の竪穴住居跡が見つかるかわからない現状で、さらなる対照は避けたいというのはよく分かります。

北貝塚と南貝塚と合わせて遺構番号を付与するべきかも問題です。中間地点にある遺構の取扱いをどうするのか、うまく切り分けることができるのか。そのプランをつくる必要はありますね。

(西野)

総括報告書の段階では、重複しない通しナンバーをつけるということで番号を付与していますので、これを活かしていくのが一番良いのではと。人骨も同様です。もう1回つけないのはどうかと。今回のように85号住居跡であることがわかって、発掘調査の結果、竪穴住居跡であることを確認した上で、85号住居跡と付けていくのが分かりやすく良いのではないかと考えています。

(高橋部会長)

あえて新たな番号を付けて分けてしまうと、確かに出土遺物が分散してしまう部分もあると思います。

(岡本委員)

最初によくよく考えて、きちんと取り決めておかないと。途中から変えるのは出来ない

ですね。

(高橋部会長)

総括報告書を起点にしてやればいいんですよ。過去に番号を付与した遺構であることが確認できればその番号を使い、新しく確認された遺構はその後に続く番号を付与する。混乱することが一番怖い。先ほど、過去の番号の振替えについて質問したのは、総括報告書でも解消できていない番号の混乱があってはいけないと思ったからです。

(谷口委員)

資料では平成38年度までの発掘調査計画のスケジュール表が示されていますが、この部会では平成38年度までの発掘調査計画を考えるのが主旨ですか。中長期の発掘調査計画のスケジュール観がよくわかりません。これから何年かけて発掘する予定なのか、予算措置の状況はどうなっているのか。

(森本)

文化庁との協議の中で、史跡内での発掘調査について許可する上で、5年～10年程度の中長期の発掘調査計画を立てる必要があると言われていています。加曽利貝塚の場合、範囲も広く、5年では一定の目的を達成するのは難しいため、10年程度で考えています。

(松田)

加曽利貝塚保存活用計画が38年度までなので、それと合わせている部分もあります。

(谷口委員)

史跡整備計画については、38年度まで計画ができていますか。

(森本)

現在、38年度までを目安として、中長期の史跡整備の計画について策定を進めています。来年度中頃に計画が確定する予定です。

(高橋部会長)

加曽利貝塚とその周辺についてのランドデザインが固まってからということですよ。ランドデザインは今年度中に完成する予定ですか。

(森本)

3月の千葉市史跡整備委員会で説明させていただいて、それを元に検討を加え、来年度の中頃までに確定する予定です。

(谷口委員)

史跡の内容確認のための発掘調査ということだと、総括報告書を作られたわけだから史跡の価値についてはすでに一定の評価は定まっています、それに加えていろいろわからないことを今後、調べるといいますか。

(岡本委員)

むしろ総括報告書を作ったものの遺跡の中身がよくわかっていない、これから発掘調査で再確認していくということですよ。

(谷口委員)

史跡の価値を補足していくということですか。

(西野)

総括報告書の中でも、わかってないことが多いのでこれから継続して発掘調査を進めて明らかにしていきますと書いております。

(岡本委員)

そのことは文化庁も認めているわけです。遺跡の保存の問題と関わりますが、竪穴住居跡はどこまで掘るのか。半分掘って終わりにするのか、もうちょっと掘らなければ竪穴住居跡かどうか分からないから、ベルトを残してもっと掘るのか文化庁ときちんと協議しておかないと。

(森本)

先ほど西野所長からも説明がありましたけれど、今回提示した資料は事前に文化庁にも確認いただいており、コメントをいただいております。竪穴住居跡を掘るのであれば、最低限ベルトを残し、将来検証できるようにしておくべきだと言われております。

(岡本委員)

ベルトを残しておくのは後世のために重要です。これから大型住居跡も発掘していくことを計画しているわけですが、ある程度掘り下げないと、何のために発掘調査をしているのかよくわからないままになってしまうのでは。今年度は特別史跡になったばかりで竪穴住居跡が半分しか発掘できなくても許容されているけれど、この状態が毎年続くと周りの人には何を目的とした発掘調査なのかなかなか見えてこない。

(松田)

調査担当としては竪穴住居跡の構造、柱穴とか入口の位置とかを把握するために必要な調査はしっかりしていきたい。当然、後世の人が検証できるような部分は残していく必要はあると思いますが、明らかにすべきところはきちんと調査していきたいと考えています。

(岡本委員)

どこまで発掘するのか市の姿勢をきちんと文化庁へ示せるようにしておかないと、やるべき発掘ができない状態になってしまう。発掘に限った話ではないですが。

(高橋部会長)

ベルトを未来永劫残せというのであれば、それでは永遠に完掘できないことになりませぬ。どこかで一回、外部の誰かを呼んで検証してもらい、あなた方の考え方は問題ないとお墨付きをもらってからベルトを取り除いて遺構全体の写真を撮影したり記録をとるといったフローを決めておく必要があります。また、検証するためにどこまで残しておくのかも決めておく必要があります、文化庁と具体的に詰めておいた方が良いでしょう。自分で発掘した成果を自分で検証する訳には行きませぬから。

(西野)

発掘調査の成果を活かしてどういう整備をしていくのかも考えていく必要があります。例えば北貝塚の住居跡群観覧施設がありますが、きちんと柱穴が発掘できているのか良く

わかっていません。他にも色々、追加の発掘調査をやらなければいけないのですが、この10年ではとても終わらすことはできません。さらにもっと長い期間にわたって発掘調査を進めていくことについても議論が必要です。そうしないと、今回の調査範囲であと何年発掘調査を行うか検討することも難しい気がします。例えば、発掘した住居跡で何らかの整備をするということであれば、時間をかけて発掘調査を行うことも可能になるのではないのでしょうか。

(高橋部会長)

褐色土の部分、85号住居跡の断面を剥ぎ取りにしても良いのではと思います。どこかでやっておく必要がある。1つの証拠を残す手段でもありますね。

(谷口委員)

先ほどの質問に戻りますが、やはり何年かけて、どれくらいの予算で調査するのが見えないと意見が言いにくいですね。国庫補助事業でやってくということですが、市として他にもっと予算を出してもう少し総合的に調べるといった考え方はないのでしょうか。また、この発掘調査計画はこの会議体で決めていいことなのでしょう。

(西野)

最初のご質問ですが、中長期的な発掘調査計画については、今はあまりにも検討の材料が少な過ぎますので、もう少し経った段階で議論していただきたいと思います。今回は、以前に千葉市史跡保存整備委員会に示した計画を参考資料として提示するに留め、30年度の発掘調査計画の部分についてご意見をいただきたいと考えています。

(岡本委員)

短期的な問題にしても、今年度の発掘調査範囲はあと何年で終わらせるかを決めておかないと。慎重にやればやるほど長引くので、この範囲はあと2年で終わらせるとか。発掘すべき場所はここだけではないのだから。実際、どの程度かかるのですか。

(西野)

もうすぐ史跡整備にともなう発掘も入ってきます。トイレをつくる、上下水道を整備するなど、それを優先でやるしかないので、史跡整備のスケジュールが決まっていない状況で決めにくいところです。ですが、今年度の調査範囲にあと何年かけるかは決めたいと思います。

(岡本委員)

そこを決めないとずるずるといってしまいます。また、年間を通じて発掘調査ができるようなスケジュールで進めていくのか、あるいは予算の範囲の中で毎年進めていくのか方針をきちんと決めておかないと。毎年、この年はこれくらい、この年はこれくらいといった感じで調査計画を決めていくのは良くない。

(森本)

発掘調査自体は年間3、4か月できるようにしていきたいと考えています。今年は始まりが遅くて実質10月から11月までの2か月になってしまいましたが。

(岡本委員)

もっといい時期にできれば、より効率的な発掘調査になると思います。見学してもらうにも良いのでは。

(高橋委員)

早稲田大学の学生も教育的な機会に触れさせて欲しいと思いますし、お手伝いできると思います。

(松田)

保存活用計画書でも大学と連携して調査研究を進めていく方針を立てていますが、来年度の発掘調査について市長等からも学生を積極的に入れて実施するようにといわれています。着手日を早めるなど、学生が参加しやすい日程で実施したいと思います。

(岡本委員)

ぜひともそれは来年度実現してください。調査研究体制の確立はすぐに出来ないにせよ、加曽利貝塚の調査研究に専従できる職員を確保して発掘調査を進めてください。中長期の発掘調査を考えるのであれば、研究機能を持つ博物館がすぐにできないのであればなおさら必要です。

これから開発に伴う発掘調査も増えるんだから、専従的に加曽利貝塚の発掘は博物館に置いて常駐する体制をつくらないといけませんが、そこをどう考えていますか。

とりあえず専従体制で加曽利貝塚に置く仕組みを。今、埋蔵文化財調査センターと加曽利貝塚博物館と文化財課との分業になっているけど、よくよく検討してください。

(滝田担当課長)

予算については議会の承認を得られれば、具体的な数字をお示しできます。人員要望は増員が認められるかどうかの状況で、その結果によって来年度の組織体制が変わってきます。3月の千葉市史跡保存整備委員会ではまだお示しは無理ですが、近いうちに調査体制も含めて発掘調査計画をお示ししたいと思います。

(高橋部会長)

史跡整備のための発掘調査は常に考えていく必要がありますし、今年度から始めた史跡の内容確認の調査も中途半端にやめることがないようにきちんと計画的に進める必要があります。その計画策定を、もう1年かけてしっかり進めていってください。

菅谷さんにお聞きしたいのですが、今回の発掘調査で確認された大型の遺構は大型住居跡と明言して良いのですか。

(菅谷)

資料の遺構確認図に大きい円で示していますが、全ての柱穴の組み方あるいは炉跡を確認しないうちは「大きな遺構の可能性のあるもの」ということしか言えません。

(岡本委員)

折角、発掘しているのだから、大型住居跡の可能性があるとかももう少し言えませんか。慎重になるのもわかりませんが。

(高橋委員)

我々も期待を持って発掘調査を進めている訳ですから。遺物の取上げ等が後で変わることが無いようにという配慮だと思いますが。いよいよ今年度は手をつけなかった南北トレンチの南側、大型の遺構の周辺を掘っていくことになるので、平成30年度の発掘調査の成果如何では大型住居跡を名乗れる可能性も期待できます。その辺りを踏まえながら、発掘調査計画を立てていただければ良いと思います。

(岡本委員)

実務的なことを聞きますが、遺物の取り上げはグリッドごとですか。

(菅谷)

原則、1点ごとに取上げており、微細な遺物はグリッド一括あるいは層一括で取上げています。

(岡本委員)

実務に関する事なので、方針が統一されていれば良いと思います。

(谷口委員)

黒色土や褐色土の成因などについて土壌学的な調査をきちんとされたほうが良いと思います。10月に来た時にも発言しましたが、黒ボク土について山野井徹氏が土壤中の微粒炭の存在に着目し、山焼きのようなことを繰り返した結果、人為的に形成されている土壌だと指摘していますよね。加曽利貝塚はかなり継続的に人の営みがあった場所で、地形も相当人為的に改変されているところですから、土壌そのものもどのくらい人為的な要因が関係しているか調べたほうが良いと思います。テフラの調査というのはこれまでもやられていると思いますが、土壌学的な調査も採用されてはどうでしょうか。

(高橋部会長)

今回の調査でもそういう準備はされていますよね。

(岡本委員)

火山灰や黒色土などの成因は加曽利貝塚の発掘調査の成果だけでは理解することは難しいので、重要なことですね。

(高橋部会長)

事例があるわりに解決してないのですね。

他に意見ありませんか。それでは今の意見を踏まえながら、発掘調査計画の修正をお願いします。

(各委員)

質問等なし。

(高橋部会長)

特になければ、これを持ちまして本日の議事を終了します。それでは進行を事務局へお返しいたします。

(森本主査)

委員の皆様、長時間にわたりご審議いただきありがとうございました。今回の意見をもとに平成30年度の発掘調査計画案について取りまとめ、3月14日に開催する千葉市史跡保存整備委員会に諮りたいと思います。

以上を持ちまして、平成29年度第1回千葉市史跡保存委員会加曽利貝塚調査研究部会を閉会いたします。

——了——